Mamiya Gallery

Vol. 14
2008

マミヤカメラクラブ会報誌

Photo／桃井　一至

総評

MCCフォトコンテストも早いもので今回で15回を迎えました。最近の応募作品の傾向としては、あまり有名な景勝地ではなく、身近で見られる被写体を撮った写真が少しずつ増えてきました。いつもの見慣れた景色も、視点と発想を変えることで見違えるような作品に変身する例が沢山あります。

そのような作品をものにする為には普段から今までとは違った視点で、見る、探す、創る、といった習慣を心がける事と、カメラテクニックなどの創意工夫が大切です。身近な被写体に新しい眼で挑戦して、創造の世界を広げてみてはいかがでしょう。

日本写真家協会会員　　原　弘男

金　賞

『神の宿る田』

鈴木　洋一（新潟）

撮影地としては有名な場所ですが、この作品の中には何か超自然的な力の存在を感じさせるような雰囲気があります。霧の海の中で朝の光があやしげに光り、いつも見慣れた棚田とは違う神々しい雰囲気があふれています。

645AFD AF ULD105-210mmF4.5 f22 1/500秒 RVP100 C-PL

銀　賞

『晩秋奏』

戸塚　勇（埼玉）

秋の日の絶好の条件が揃った最高の装いの姿を、しっかりとした構図で見事に表現しきっています。まるで日本画を見るような端正で美しい作品です。

645AFD AF45㎜F2.8 f22 オート－0.3EV補正 RVP100F C-PL

銀　賞

『陽　春』

大島　智美(福島)

この桜は石仏と祠を守る村の鎮守のような存在なのでしょう。朝日をいっぱいに浴びたその姿は堂々として風格があります。花のボリュームも光の具合も申し分ありません。

645プロTL ULD C300㎜F5.6N f22 1/15秒 RVP100F UV

銅　賞

『霧影の夜明』

井澤　信夫（埼玉）

望遠レンズで部分的に風景を切り取ったことで、朝の光と木立の影が作り出した幻想的なイメージが強調され、霧のたなびく様子もよく表現されています。

645プロTL ULD C300mmF5.6N f16 1/60秒 RVP100

銅　賞

『丘』

佐藤　進（東京）

広大な美瑛の丘の特徴がよく表現されています。プリントの際に麦の黄色を強めたことが良かったと思います。雲がなんともいえずいいですね。広がり、高さ、そして動きを感じます。

645プロTL C55-110mmF4.5N f16 オートー2/3EV補正　RVP100 PL

銅　賞

『水躍る』

生頼　弘（奈良）

岩に撥ねる水しぶきを、適切なシャッタースピードと効果的な光線状態が得られる角度で捕らえているので造形的に見ごたえがあります。一瞬の時を止める写真ならではの魅力にあふれた作品です。

645AFD　AF ULD105-210mmF4.5　f5.6　オート−1.0EV補正
RVP100

コダック賞

『湖畔焼ける』

星野　勝彦（群馬）

すばらしい朝焼けに感動しました。撮影のタイミングが良かったので雲の微妙な色合いを捉えており透明感が見事に表現されている秀作です。

RB67プロS　C50mmF4.5　f22　1/2秒　E100VS　SL

入　選

『白銀の世界』

川野　豊彦（広島）

超広角レンズを使って被写体に近寄って撮っているために、ススキの形がデフォルメされ面白く描写されています。タングステンフィルムを使用し、青白く描写した事も成功しています。

645プロTL C35㎜F3.5N f16 オート RTPⅡ

入　選

『春一番緑』

山本　貴一（新潟）

都会と違って雪解けを待ち、草も木もいっせいに芽吹く雪国の春の様子がごく自然に表現されていて好感を持ちました。この季節独特のムード、この土地ならではの空気感を感じます。

645AFD AF ULD105-210㎜F4.5 f13 1/15秒 RVP

入　選

『百花競演』

萩野　信典（神奈川）

パノラマの比率をうまく生かして撮影しています。レンズの選択が的確だったので画面に広がりと遠近感を持たせ、白樺林とユリのバランスも良くとれています。

マミヤ7Ⅱ　N50㎜F4.5L　f22　1/30秒　RVP　135パノラマアダプター

入　選

『夕　照』

中田　友一（栃木）

どこかほっとした印象を与えてくれる心和む作品です。夕方の暖かい光と静かな水面のたたずまいが対比しながら調和し、そうした思いを与えてくれるのでしょう。

RZ67プロ　Z90㎜F3.5W　f32　1/15秒　RVP100

入　選
『老いる』
松野　敏秀（東京）

過酷な気象現象の中でたくましく生きるカラマツの姿を、１本の根で表現した点が良かったと思います。もう一歩近寄って撮るとさらに形の面白さが強調されたことでしょう。

645プロTL C55㎜F2.8N f22 オート E100VS UV

入　選
『木立ち』
武藤　繁一（滋賀）

杉一本一本の明るさに違いがあってリズミカルな美しさが出ています。このリズム感を林の奥まで続けて見せる為にコントラストの弱い、柔らかい描写のフィルムを使うのも一案です。

RB67プロⅡ Z180㎜F4.5W-N f32 オート－1/3EV補正 fortiaSP UV

入　選
『夏山涼風』
井川　クキ子（東京）

自然の作り出す造形というのはまったく面白く不思議なものですね。ワイドレンズを使った事により、実際よりも遠近感を出したことが成功しています。

645AFD AF35㎜F3.5 f22 1/20秒 RVP

入　選
『染まる雲海』
太田　秀男（長野）

朝日に染まる雲海がまるで迫りくる波濤のように見えて迫力があります。山がもう少し稜線まで写っていると雲海のスケール感がさらに増してくると思います。

RB67プロS　KL127㎜F3.5L　f22　1/8秒　fortiaSP

入　選
『後立山初冠雪』
小田　薫（東京）

初冠雪というのは山にとってまさに晴れ舞台と言ったところでしょう。昨年の紅葉は鮮やかさがいま一つでしたが、ナナカマド等の秋の装いがその晴れ姿に彩りを添えています。

マミヤ7Ⅱ　N80㎜F4L　f22　オート　RVP100　SL

MCC Photo Contest 16

写真の醍醐味、多彩な個性の競演……
それがMCCフォトコンテスト。
第16回の応募期間は
2008年2月12日（火）～3月21日（金）です。
写真テーマは自由です。ふるってご応募下さい。

MCC乗鞍岳撮影会フォトコンテスト入賞作品

撮影指導・作品選　花畑　日尚

総評

今回の撮影会は天気に様々な変化があり、久しぶりに良い撮影会でした。被写体としては特に早朝の雲海や滝雲が良かったので応募作品が早朝撮影に片寄るかと思いましたが、想像以上に変化のある作品が集まり嬉しく審査できました。皆さんがそれぞれの状況を的確にとらえて季節表現ができていたのが印象的でした。

写真家　花畑日尚

金　賞

『滝　雲』松野　敏秀（東京）

ここは今回の撮影地の中で最も多くの応募があった場所でした。ほとんどの人が同じシーンを撮影しましたが、露出、構図、諸々でこの作品がピカイチでした。雪渓の配置で遠近感を強調し、抜けの良い描写で特に朝の空気感が最も良く表現されていました。

645プロTL　ULD C105-210mmF4.5　f16　オート　E100VS

銀　賞

『芽吹きのころ』荒川　信利（埼玉）

自分の狙いを明確に表現しています。構図のバランスが良いので芽吹きの感じが良く出ています。広い風景の中でこの被写体だけを切り取ったことは、写真をとる目が出来ているという事だと思います。

645AFD　AF ULD 105-210mmF4.5　f32　4秒　E100VS　PL

銀　賞

『ナナカマド花盛り』生頼　弘（奈良）

広角レンズを使い前景のナナカマドを大きく取り入れ、自分のイメージ通りに仕上げられた作品だと思います。露出がよいので、うまく季節感が出ています。

645AFD　AF35mmF3.5　f22　1/10秒　RVP100

銅　賞

『涼　風』米屋　進（埼玉）

レンズの特性を理解し思い切って被写体に近寄りワイドレンズで切り取ったところにこの作品の価値があります。PLを使ってメリハリを出していますが、そのために少し新緑の爽やかさは消されてしまっています。－0.3補正していることが少し疑問に思います。

645AFDⅡ　AF35mmF3.5　f22　オート－0.3補正　RVP100　PL

銅　賞

『早朝の雪渓から』浦上　景一（東京）

多くの方が撮影された朝の滝雲ですが、この作品の良いところは前景に大きく雪渓を取り入れたことです。効果的に雪渓が入るようにポジショニングをとっています。また、難しい露出ですが的確で朝の空気を良く表現しています。

645プロ　ULD C105-210mmF4.5　f22　オート　RVP100　UV

銅　賞

『風雪に耐える』 行川　征子(埼玉)

ワイドレンズで撮影していることがわからないような自然な作品です。ダケカンバの枝ぶりを主役においてシンプルに仕上げたところに好感がもてます。プラス補正をしたことにより緑が新鮮に写り、爽やかさが出ています。

645AFD　AF35mmF3.5　f22　オート＋1.0補正　RVP100

JTB賞

『朽ちる』 磯崎　和夫(埼玉)

樹林の中で通り過ぎてしまいそうな所ですが、よく目をつけ撮影されました。何気ないところを見つけて作品にする事も写真の楽しみの一つですが、良いと感じた所を作品に仕上げている苦労が見て取れる良い作品です。

RZ67プロⅡ　Z250mmF4.5W　f22　オート　E100VS

入　選

『朝の光』 笛木　祐知(埼玉)

難しい被写体によくチャレンジしたと思います。マイナスの露出補正が的確にされていることが功を奏しています。手前のシルエットが重く感じるところですが雪渓を入れることによって緩和させて、写真を活かしました。

RZ67プロⅡ　APO Z250mmF4.5　f45　オート－2/3補正　RVP100

入　選

『霧流れる』 川崎　茂(茨城)

一本の木をうまく活かして千変万化する自然現象の瞬間を的確にとらえています。足場がなかった為だとは思いますが、もう少し右に移動して木と雪が重ならないようにできたら尚良かったと思います。

645プロ　ULD C105-210mmF4.5　f22　オート　RXP

入　選

『黎　明』 小野　望(神奈川)

朝一番の日の出前の撮影でしたが、題名どおりの黎明の雰囲気がよく出ています。日の出を待たずして撮ったことが良かったのでしょう。色温度の低さとフィルム特性を生かし、山の狭間の靄の空気感を出しています。下の暗部を捨ててもう少し空を多く入れたら黎明という感じがさらに出たかもしれません。

RZ67プロ　APO Z350mmF5.6　f32　2秒　E100VS

入　選

『風雪に耐えて』 星野　幹雄(神奈川)

ふと見過ごしそうな風景をよく捉えています。コイワカガミのピンク色とミツバオウレンの白が効いていて、少しアンダー目の露出が高山の雰囲気をうまく出しています。願わくは画面右上の隙間と木が目障りなので、左のダケカンバを中心にまとめたほうが良かったかもしれません。

Newマミヤ6　G75mmF3.5L　f16　1/15秒　RVP100

入　選

『静　寂』

井澤　信夫(埼玉)

白樺とヤマドリゼンマイにスポットで当った陽の光をシンプルにまとめています。光を見て即座に撮影されたのが良かったのでしょう。その光を生かすようにアンダーな露出にされたことも正解でした。

645プロTL　ULD C105-210mmF4.5　f16　1/125秒　RVP100

プロユーザー訪問

久しぶりのフイルム撮影

桃井　一至 Kazushi Momoi

私とマミヤ製品の付き合いは20年くらいだろうか。師事した故長友健二氏がRB67proSと645PROユーザーで、マガジン＆フィルム交換というちょっと変わった付き合いから始まった。毎日、毎日、カメラの傍らでフィルム交換。撮影が終われば掃除。遠い存在であった中判カメラが急に生活の一部のようになり、言い方を変えれば、怒られている目前にはいつもマミヤ製品があった(笑)。引きブタの抜き忘れ程度ならカワイイほうで、マガジンの落下、設定の失敗などなど言い始めればキリがないくらい思い出がある。(そのほとんどは失敗)　当時、文京区茗荷谷にあったマミヤに足を運び、メンテナンスを依頼。窓口のMさんに慰められながら、何度重い足取りで事務所に戻ったことやら。

その後、独立とほぼ時を同じくしてRZ67を入手。RB67に慣れ親しみ、故障の少なさなど信頼も高かったため、迷わずマミヤを選んだ。そして今回は縁あって同じフォーマットのマミヤ7IIで撮影。ここしばらくはデジタルカメラがほとんどで、フィルムでの撮影は久々。こんなことをここで書くと笑われそうだが、モデルチェンジして名称が変わったフィルムの購入にすら戸惑うありさまで、忘れかけていたフィルムカメラ特有の操作を思い出しながらの撮影となった。

マミヤ7IIは中判カメラとしてはコンパクトなボディとレンズ群が魅力。そこで山口県の角島と沖縄へと持ち出した。自然のブルーに心を癒されながら、一枚、一枚を大切にフィルムに刻んでいく。フィルム残量を考えながら撮影したのは、いつ以来だろう…。巻き上げレバーって、久しぶり…。この明るさだと露出はいくつだろう…。おっと、ピントを合わせなきゃ… 。カメラの進化とカラダの退化を実感しながらの撮影となった。たまにはこんなプリミティブなカメラも楽しい。

京都府出身。
写真家・長友健二氏に師事の後、1990年に独立。
人物・海外風景などを得意分野とし、雑誌・カタログ撮影など展開する傍ら、撮影のみならず、カメラ誌の記事執筆やセミナーでの講演など、カメラ業界で幅広く活躍。
NHK教育テレビで放映された「趣味悠々・デジタル一眼レフ撮影術入門」のDVDが発売中。

マミヤ7Ⅱ　N80mmF4L

表紙　マミヤ7Ⅱ　N80mmF4L

マミヤ7Ⅱ　N80㎜F4L

マミヤ7Ⅱ　N65㎜F4L

講師　山崎　正路

フィルムとデジタルの特徴をつかみ使いこなそう

露出補正と色温度

写真を撮る時の露出はTTL露出計がカメラ内に組み込まれ精度が上がった現在では大きく狂うことは少なくなりました。ただし、表現したい色を決める露出補正は必要です。色温度となると銀塩フイルムでは写真電球用のタングステンタイプ(色温度3100〜3200度ケルビン)、日中やストロボではデーライトタイプ(5200〜5500度ケルビン)のフイルムの選択でほぼ正しい色を出すことができます。またフイルムのメーカーや種類を変えることにより、ナチュラルさや鮮やかさを強調した表現を選ぶ事ができます。しかし、記憶色や好みなど、フイルムも思いどおりの色が再現出来ているとは限りません。正確な色やカラーバランスを再現することはレンズなどの違いもあり難しい問題です。プリントや印刷の段階でも色の違いがでてきます。デジタルカメラでは撮影後にカラーバランスや色調を変えることも出来ますが露出や色温度はポジフイルムでは撮影時にイメージに合わせて調整しておく必要があります。

写真表現は正しい露出、正しい色温度で撮られた正確で標準的な写真が必ずしも良い写真になるとは限りません。作者の狙いで、見せたい色調を強調したり、露出をアンダーにしたりオーバーにしたりすることで写真のイメージを印象づけることができます。ポジならイメージに合った写真を選べば良い事です。デジタルでは基本となる色の認識を持たないと、わけもなく色や明暗比をいじり、迷うことになります。

デジタルカメラではヒストグラム表示させると露出や色の傾向が分かります。基本はヒストグラムが枠内に収まる様に露出補正をします。

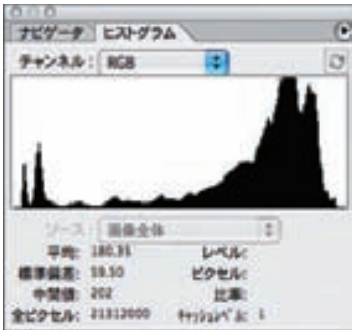
マミヤZDバックのヒストグラム

露出

カメラは18パーセントのグレーを基準に露出をはかります。
画面全体が白い被写体では反射式メーター内蔵のカメラでは暗くなります。白色など明るい色はプラス1〜2EVの露出補正が必要です。

露出補正なし

マミヤ ZD バック　撮影時に補正　　プラス 2 EV 補正

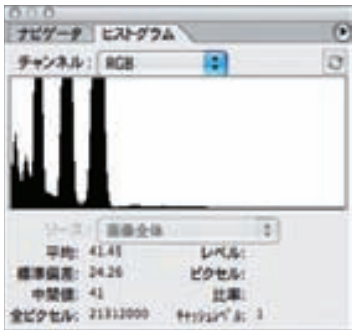


補正後のヒストグラム

空の色を多く計っています。青い空はマイナス1／2〜1 EV 補正が基準です。

露出補正なし

マミヤ ZD バック　撮影時に補正　　マイナス 1 EV 補正



補正後のヒストグラム

フィルムの発色

最近の風景写真は派手な傾向を望む人が多く人気もあります。コダックE100VSやフジのベルビアも派手な発色のフイルムですが、今回は、フジのフォルティアとE100VSを比較しました。フォルテイアは赤みや青み、草の緑などかなり強く発色されています。正確さを求めるのではなく派手なことを得意とするフイルムなので目的とするイメージを持って使うとよいでしょう。人の目は順応性が高く色は並べて比較しないと分かりません。18パーセントグレー板など比較する対象がない場合はコンクリートやアスファルトなどのグレーを写してみると色の傾きや傾向が分かります。

フイルムの比較はホルダーを換えて撮ることが最良ですが、マミヤ7Ⅱなどホルダー交換のできないカメラでは最後の１枚とフイルムを入れ換えて最初の１枚を撮り比較してフイルムの特徴をつかみます。

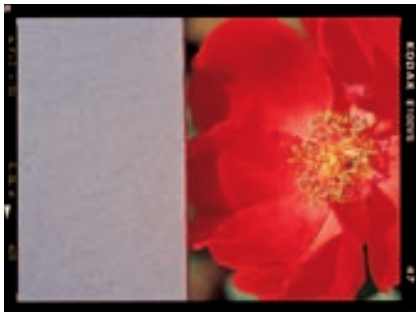
マミヤZDスタンダード

コダックE100VS

富士フォルティア

フォルティアの色と比較するとコダック100VSはかなり黄色っぽく見えますが18パーセントグレーを見ればこのフイルムでもかなり赤味が強いことが分かります。CC フィルターを使用した場合075Gぐらいのフイルター補正でほぼ正確なグレーになりますが、この色味もこのフイルムの特徴です。屋外の花や人物などの撮影ではノーフイルターで好ましい色調です。

マミヤZDスタンダード


コダック 100VS

フィルムの発色をデジタル出力に役立てよう

デジタルカメラでは色々なフイルムを使い分けるようにカラーモードで発色や鮮やかさコントラストを変えることができます。撮影後にパソコンでコントロールするのであれば素材重視やスタンダードなどのポジションで撮影しておくと良いでしょう。

スタンダードでは地味な印象ですが、デジタルカメラはネガカラーの様に色々な色調に調整ができます。フイルムの特性が分かってる人ならイメージのフイルムに近い状態に追い込むことも可能です。自分で処理をするのであれば色の知識やパソコン、ソフトなどの知識などが必要になります。

一方銘柄を変えることで色が決まるポジフイルムではフイルムの特性と、色温度を理解していればデジタルの様に色の後処理を考える煩わしさはありません。ある意味デジタルの難しさはどんな色にでもなると言うことです。ネガフイルムでもうまくプリントの指示をできる人は良いプリントができます。

フイルムの色から学べることは多くあります。ポジフイルムとデジタルが共存する今はフイルムメーカーの色作りの特徴などを吸収してデジタル補正に生かすと良いでしょう。

マミヤZDスタンダード

富士フォルティア

ZD スタンダードデータをパソコンで彩度、色調補正などをしてフォルティア風に仕上げました。

色温度

デジタルカメラでは色温度は簡単に補正することができます。下の作例は日陰で撮影したものですが、黄色い花なのでさほど青みを感じませんが、デーライトフイルムではぼけた背景に青みがでています。デジタルでは日陰マークに色温度に合わせることで本当の黄色を出すことができます。日陰マークはメーカーにより7000度～7500度ケルビンに設定されています。この時色温度計は7050度ケルビンを示しています。E100VSは5500度ケルビンです。

デジタルは色温度設定7000度ケルビンに設定。フイルムでデジタルと同じ様に補正するのであれば、アンバー系フイルターで対応する必要があります。

コダックではラッテン 81、81A、81B、81C、81D、85C、85B

富士では LBA-1、LBA-2、LBA-3、LBA-4 とだんだんに濃くなります。

色温度 7050度ケルビン

コダック 100VS

ZD スタンダード 7000度ケルビン

下の例は秋の夕日のあたっている条件で色温度を変えて撮影しています。

色温度を下げるにはフイルムではフイルターを使います。色温度の設定が簡単にできるデジタルカメラではイメージを取るか、花の色をとるかで選ぶ写真が変わると思いますが、写真のイメージを色温度で変えることは効果的です。

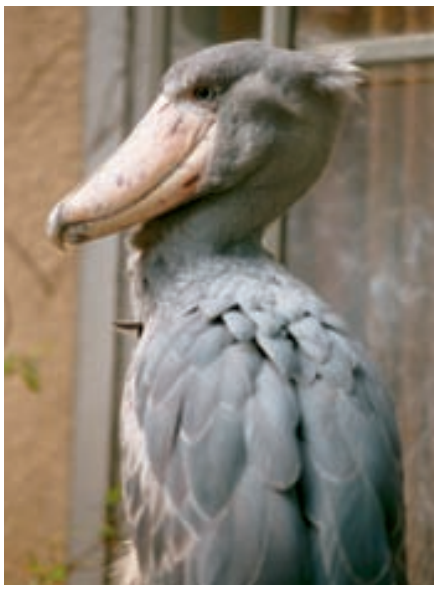
4000度ケルビン

5000度ケルビン

6000度ケルビン

7000度ケルビン

色温度のコントロールやアンバーフイルターは補正に使うだけではなく古いイメージや暖色系を得る為に意識的に強調することも効果があります。



ZD スタンダード 5200度ケルビン

ZD スタンダード 7500度ケルビン

マミヤZDバックとコダック100VSの比較

マミヤ645プロTLのカラーバージョンをホルダーの交換でデジタルバックとフイルムE100VSで撮影しています。デジタルや印刷では後工程で特定の色に近づけることもできます。

フイルムを参考に彩度や特定色で合わせて行くこともできます。素材的なデータは誇張されることがなくやや地味な印象を受けますがコントラストがあり派手である写真は印象的ではあってもそれだけデータが間引かれたことになります。商品モードや、人物モードなどそれぞれの特徴をつかんで、好みのポジションを見つけるのはフイルムの選び方と同じです。

下のカラーでもわかりますが、同じ赤といっても、色々な赤があります。材質や反射率、照明などの条件でも変わります。カルチェの赤やフェラーリの赤など様々です。自動車のカタログなどでも、写り込みや光の具合などで色を正確に伝えるのは難しいのです。このカメラは車の塗料で塗装しているのとの事なので実際の色のイメージはつかみやすいと思います。

フイルムでもデジタルでも、できるだけ後処理に頼らず、現物に近く様々な色がバランスよく表現されるかが重要です。

120マクロ　色温度5200度　カラーモード商品　ISO 50 スタジオストロボ使用

E100VS

マミヤ 645TL プロのカラーバージョンは P24 に詳細がでています。

一台のカメラでフイルムとデジタルが使える645AFD

デジタルカメラが一般的になりフイルムからデジタルに乗り換える人も多くなりました。デジタルでは後処理の自由度などが魅力ですが、撮影内容や目的によって、モノクロとカラーを使い分ける様に銀塩フイルムとデジタルを使い分ける事も作品を創る上では重要です。645AFDⅡはハイブリッドカメラです。ホルダー交換の機能を最大限に生かしてデジタルとフイルム両方が使えるシステムになりました。マミヤ645AFDⅡを使っているユーザーであればコンパクトなデジタルホルダーを加えるだけでデジタル環境が整います。

デジタルバッグも以前のようにコードの取り回しの煩わしさもなく、バッテリーなどもこのサイズに収まっていることは驚きです。レンズも6×4.5サイズの画角とほぼ一緒で幾分狭くはなりますが違和感も少なく使うことができます。元々35ミリサイズに比べて大伸ばしに強い中判の世界です。2000万画素を超える大型のCCDは精密描写にすぐれ、細かな部分も表現することができます。ただここまで画素数が上がると細かなブレなども気になります。

フィルムでは考えられなかった倍率で確認できる為、欠点がよく見えるのです。デジタルでは絞り込みすぎると回折現象なども気になります。フイルムのときに使っていた最小絞りより1～2絞りあけた方が良い結果が得られます。

645AFDⅡとデジタルバックはフイルムと同じ撮影環境で違和感もありませんがフイルム以上に丁寧に撮影することが必要です。基本的にRAWデータでISO感度は50が最もベストな画質が得られます。

ALPA レポート

カメラ誌「写真工業」でカメラレポートを書かれているMCCクラブ員川又氏から寄稿頂きましたALPAカメラのレポートを掲載します

2007年3月開催されたフォトイメージングエキスポのマミヤカメラ展示ブースに見馴れぬカメラが展示されていました。マミヤカメラの全製品は自由にふれる事ができ、多くの来場者がカメラを構え賑やかな声が会場に流れていました。見馴れぬカメラと申しましたが何年か前にカメラショーの際見掛けた事を思い出しました中判カメラの ALPA です。

社員の吉沢さんにカメラを見たいと申し出ましたが今回のショーに間に合はせるのが精一杯だったとの事。後日カメラを見せて貰う事を約しガラス越しの対面でした。ALPA と云えばスイスの時計メーカー、ピニオン SA 社に依り1944年から1989年迄製造された精密一眼レフで特に500mm f1,8 マクロスイーター付きは高級カメラファンの憧れのカメラでした。45 年の長い間発売されたのに約42000台との事ですから年間1000台位の出荷数だった訳です。今日でもアルパの一眼レフには深い思い入れの人々でクラブも有ると聞いています。

一眼レフの時代が終わったアルパは約10年の年を経て1998年フォトキナに於てCapaul Weber社がALPAの国際使用権を取得。ALPA の名称は同じでも全く新しく生まれたのが今回マミヤ社が日本代理店と成り販売を開始した中判カメラALPAです。展示会のあと連絡があり、始めて金属独特の質感と重量感を味わう事となりました。先づ驚いたのは精度の高さでした。色々なカメラ(特に名機と云われる物を含め)を見たり使ったりして来ましたがALPAを越えるカメラには出合った事がありません。

何はともあれALPAを紹介させて頂きます。使用フィルムは120専用です。現行は12TC･12WA･12SWA･12XYの4機種で、12XY はスタジオ用の感が強いので今回は省かせて頂きますが ALPA のカタログに記載されて居りますので御らん下さい。12TCは12SWA･12WA と比べ形も小型ですがアクセサリーを含め全機種と共通です。12TC「トラベルコンパクトモデル」とメーカーもコピーして居ります通りこれで 6 × 9 のサイズが撮影出来るのかと疑問を持ちましたがその心配は皆無です。

三機種に共通の撮影画面は44×66、6×6、6×7、6×9の4サイズに対応できる様にリンホフ製のホルダーがALPA用に加工され発売されています。私の個人的考えでは6×9撮影がALPAの性能を完全に引出せると思います。カメラは厚さ20mmのボディの前にレンズ、後にフィルムホルダーを取付け三部一体型と成ります。精密に削り出された各パーツはいづれの取付部にも吸い着く様なタッチでボディ上部に有る取付レバーに依り固定されます。「百聞は一見に如かず」で機会が有りましたら是非マミヤ社でこの精密度を体験して頂きたいと思います。

特徴であるグリップが左右に有るのはALPAのみと記憶して居ります。後述しますがハンドグリップ2ケが素晴しい役立ちをしますので私はこれに拘わって居ります。実写に際して中判カメラの全てと云っても過言でない三脚使用は不可欠ですがALPAは三脚使用と手持ち目測に依る撮影でも充分カメラブレのない撮影が出来ます。

ALPAのレンズは目測撮影を考え細く目盛が印されています。スーパーアングロン f5.6 72mmで1m 1.10、1.20、1.30、1.50、1.70、2、2.50、3、3.50、4、6、8、15m、∞と印されて、被写界深度表の明記され絞りと速度を決め即撮影と成ります。72mm を一例として記しましたが他のレンズも同様仕様です。交換レンズは24mm～250mmの計29本が有ります。メーカーはシュナイダーを主とした一級品揃いです。目測撮影の時、構図はビューファインダーを使用し、縦位置横位置はファインダー先端のリングを廻転変換します。そして構図を決めます。尚ビューファインダーはレンズの視野枠が記入された円板を交換し使用レンズに対応します。

ハンドグリップを強調して来ましたが、ここで出番と成ります。12SWA購入の際に先づグリップはローズウッド製を選びました。人間工学的にも考えられた指がかりが有り、左右両手でカメラを構え肘を身体に密着させるとカメラは完全に固定され人込みの中でのスナップ、集合写真でも素早く撮影出来、レンズシャッターの強みもあり、1/4 秒の撮影も可能でした。

くどい様ですが左右の手で握りしめたカメラの固定感は抜群です。文中の作例写真も手持ち撮影を意識して多用させて頂きました。三脚使用禁止の場所が何故か多く成ったこの頃ですが、この方法で注意を受ける間もなく撮影は終わっています。ALPA は通常横位置でのフレーミングですが、ホルダーを縦位置に取付ける事で両手のホールディングはそのまま縦位置の構図も撮影出来ます。これは実写では非常に有効です。

次に12TCですが、12TC･WA･SWAをALPA3兄弟と言わせて頂ければ12TCは末っ子と成ります。この末っ子は兄貴達に全く負けない性能を持っています。通常カメラと同様にグリップは1ケ使用ですがボディを小型にして有る為、これは当然の仕様と云えますレンズ取付レバー、ホルダー取付レバーの形も違いますが動作は同じで全てのパーツは共用出来ます。私は12SWAでスタートし12TCは後に使用しましたので2機種の相違点も良く理解し、結果12TCで同一レンズを使用した場合、全く同一の作品を撮る事が出来る事も体験出来ましたし、両者の特徴も充分理解出来ました。

12WAと12SWAの相違点は1ケ所のみで全て同一構造です。相違点はSWAには25mm垂直移動のライズ機能が付加されています。この機能を生かす事で建築物や樹木の上方すぼまり等を補正出来ると云う事です。大判カメラには必ず付属している機構ですが高いビルを見上げれば人の目でも上はすぼまる訳で余り気にする事はないと思います。もっとも建築撮影では必要と成る機能ですが、この辺りは使われる方の判断で決められたら良いのではないでしょうか。

12TCには付属してませんがWAとSWA にはレンズ取付部のレバーの右側は自動的にロックされます。メーカーのレンズ保持への行き届いた配慮と云えます。レンズを取付け左のレバーを起して右側だけのロックがどの程度の保持力が有るかカメラを振って見ましたが、いささかのガタ付きも有りませんでした。大判カメラのレンズ止め金具は数十年前からいささかの変更もない旧型のままですがレンズが落ちたとかハズれたとかの事故は操作ミスさえなければ聞いた事もありません。まして ALPA の構造では起こり得ないと思いますが ALPA の場合レンズのフランジバッグの関係で角型のチューブ先端にレンズが取付けられたタイプも有りますから、

12SWA 72㎜ f11 1/4秒　手持ち

その辺りの対応と云えるでしょう。

WA、SWAには左右にハンドグリップが付属している事は前述しましたがカメラを構えて右上部に前後用、左上部に水平用の水準器が設けられていますので撮影時に重宝しています。ストラップ取付金具もグリップに付けられています。

次にビューファインダーの説明をします。三脚使用時はホルダーを外しグランドグラスに依りピントや構図を決めます。この時にもビューファインダーにより大体の構図決定をしています。ビューファインダーは手持ち撮影用に使用するものと当初思い込んで居りましたが、これが正しい使用法ではと考え直しました。三脚使用時から目測に変更する際にも常用する事がベストと思います。通常のカメラはビューファインダー仕様のパーツを取付けの際クイックシューに差し込む方法が殆んどですが、ALPA はビューファインダー底部に2本の金属ピンを付けボディに落とし込み 2 ケのネジで締め、固定します。ビューファインダー左側に水準器が付けられファインダーを通して常に水平を確認出来るのも手持ちの際有効です。

フィルムホルダーは ALPA/LINHOF 製が4種発売されて居る事は前述しました。確にこのホルダーは自他共に認めるベストホルダーである事は充分認めますが何故か120のみなので6×9で8枚撮りは一寸残念な気がして成りません。ALPA のカタログを読んでいた所バックアダプターMA と云うパーツを見てマミヤさんに問合せた所なんとマミヤ6×8用の電動ホルダーが使えるアダプターとの事。早速手配して貰い手持ちの電動ホルダーに付け撮影したところ、快適そのものスイッチを押すだけで独特の音を出し乍ら巻上げ完了。加えて220フィルムも使用でき16枚撮りと成りました。しかもマミヤの電動ホルダーの件はこのままでは終わらないのです。ALPA 社はマミヤ社との代理店契約より以前に当然かも知れませんがマミヤ社の技術力を高く評価していたと思われ、電動式6×9 ホルダーの製作依頼があった由、9 月頃に試作モデルが完成しテスト撮影をさせて頂きました。アダプターを介さずホルダーを直接本体に取付けた為外観も美しく加えて操作性も云う事無しでした。

このマミヤ製のホルダーはフィルムコマ間が従来の物より広く、カットした場合も余裕が有りポジの保持も良く成りました。ALPAの取付部は精巧な仕上げ加工なので、マミヤ製ALPA仕様電動ホルダーに深い期待を持ち乍ら細部を点検しましたが流石マミヤ製で取付部の削り出しも純正部品にも優るとも劣る事無しで我事の様に嬉しく成りました。飽く迄も私見ですがALPA社はこのホルダーを見て今後何かと製作依頼が有る様な気がして成りません。仮にその様な事が実現する様な事が有れば、マミヤ 7 用レンズをALPAに使用出来るアダプターが出来る事を先ず望みます。このホルダーは2008年3月以降の発売となるようです。

思えば私は他社のカメラも多く使って居りますが、マミヤ6に始まり、645 の 500、1000S、プレス、RB、RZ、645 プロとマミヤカメラを使ってき、これらは常に使用出来る状態にしてあります。時にマミヤ6のバックフォーカシングシステムとマミヤCタイプのローライも成し得なかったレンズ交換式の二眼レフはカメラ史に残る機種として愛用しています。マミヤの製品にここまで縁が有ったのは殆どトラブルがなかった事とメカの精巧さ、加えてレンズの描写力が全てと思っています。ここ迄書くと意図的にと思われるかも知れませんが、マミヤのカメラが好きなだけと御理解下さい。

ALPA を使用して改めて感じた事、右を見ても左を見てもデジタルのみがカメラであるが如き様相の写真界ですが、そろそろフィルムカメラの良さを見直しても良いのではないでしょうか（デジカメの優秀さは充分認識していますが）。フィルム装填から始まりピント、露出、と何から何まで考え、指を動かしシャッターを切る。現像上りを見て一喜一憂する。これが写真を愛する人の喜びと常に思って居ります。クラブの皆様と撮影を御一緒する度に車内での会話からも考えが同じだなあーと私も楽しませて頂いて居ります。

ALPAは写真を撮っている事を実感させて呉れる素晴しいカメラです。残り少い写真人生の最後迄座右のカメラとして使用したいと思って居ります。撮影結果の中で気に成る事が有ります。72mmf5.6が中心ですが4×5用に75mmf5.6（共にシュナイダー製）を使用して居ります。恐らく同系のレンズと考えられますがALPAでの結果が非常に良く、特にハイライトからシャドウへのコントラストは大きな差が出て居ります。考えられるのはカメラの内面反射ではないかと云う所ですが、飽く迄も推測に過ぎません。

その様な事もあり目下のところは72mmのみで撮影して居ります。ここまでALPAを使って思った事等を記させて頂きました。然しALPAだけがカメラでは有りません。

マミヤ社には7Ⅱ、645、RB、RZとカメラ史に刻まれる他社に無い機構を持つ名機が有ります。会員の皆様が常に美しい作品を撮り続けて頂く限り、フジフィルムもデジタルだけの時代では無いと新製品のフィルムを開発して呉れると信じて居ります。撮影会でお目にかかれる事を楽しみにして居ります。

雑文お許し下さい。

平成19年12月14日

会員　川又正卓

ALPA OF SWITZERLAND

マミヤデジタル･イメージングは
「ALPA」の国内総代理店です

12TC

12WA

12SWA

12SWA 72㎜ f11 1/60秒　手持ち

山岳写真のススメ ④

川口 邦雄

氷雪のハイライト中のハイエストライトとは？

マミヤ645AFD　f11　1/180秒　PL使用　E100VS2倍増感（ISO200）にて使用

山の雪といえば白い。とくに太陽光に当れば真っ白である。ということです。

ところが！その“白”の中に実は、ハイエストライトとハイライトの段階差がかなり広くあるのです。つまり“光り輝く白”“輝く白”“白”“かげりのある白”“かげった白”……エトセトラ。これらはわれわれの肉眼で見れば、まとめて“白”にみえる訳ですね。“光り輝く白”とはつまり太陽光の正反射、すなわち氷のキラキラのようなもの。以下、段階的に光と雪との反射角度が変化することによって前述のようなグラデーションが現れてくる。（これは雪の質感も関係します）

一般に日照下の雪の写真を撮るとき露出計指示値をプラス１～２せよといわれているのは適性露出の値が反射率 18%に設定してあるから、100%反射率のもの（白いもの）を撮っても18%に写る。つまり“灰色っぽく写った白”が白くなるということ。でもさきに述べたハイエスト描写となるとこれではちょっとオーバーになる。つまり“光り輝く白”から“白”あたりまで、ともかくまとめて白く描写される。つまりハイエストライトがオーバーに、にじんでしまうことになる。これでは“白の中の白”のキリッとした表現ができない。このデリケートなハイエストライトの白を描写するにはフィルムのラチチュードを活用して、ちょっとアンダー気味の原板をつくるのがよい。そしてプリントの時、ハイエストライトを“真っ白”に仕上げてもらえば OK ということになるわけ。

このあたりの実際描写がどうなっているかは、作例をみて下さい。新雪がきたばかりで反射率100%に近い山雪の白が、ハイエストライトぎりぎりに写っていることと、ふつうにいうハイライト描写の差がわかるでしょう。これはわざわざPLフィルターでグラデーションを強調したものです。

山は中国四川省、チベット八神山の一つ、シャノドジ（夏諾多吉神峰、5958m）、沖古寺からの夕景です。

第2回中判カメラフォトコンテスト

審査／評：岩本恵次

主催：コダックフォトクラブ／日本ハッセルブラッドフォトクラブ／ペンタックスファミリー／マミヤカメラクラブ

このコンテストは4団体の写真クラブ会員限定のイベントとして開催されました。入賞作品30点を集めた作品展は2007年9月26日(水)～10月2日(火)にコダックフォトサロンで開催されました。ここでは上位4点をご紹介します。

総評

中判カメラを使用する人は風景写真の撮影が圧倒的です。中判カメラ撮影の魅力はその圧倒的なシャープネス、大伸ばしに耐えうる豊かな質感描写です。今回の入賞作品は、それらの特性をベースに、自然の光を自らの味方として、中判カメラの描写力を存分に活かしている点が見逃せません。コンテストではいくら作品の質が高くても、どこかで見た写真では評価が低くなってしまいます。新鮮で個性的なことがキーポイントです。その点、今回金賞を射止めた「春の輝き」はスナップ感覚の表現で新鮮な印象を受けました。

金　賞

『春の輝き』

松尾　勝義(島根)

ようやく訪れた春の喜びと輝きが画面に満ち溢れています。風景写真では邪魔者扱いされがちなビニールハウスを効果的に活かしています。画面構成にムダがなく、写っているすべてのものをうまく活かしています。

ペンタックス645NⅡ　E100VS

銅　賞

『流れの大文字草』 糸井　隆(静岡)

硬質な岩と軟質な水の流れとの絶妙なバランス。長時間露光による流麗な流れの描写、一見弱々しい花の存在を際だたせています。技術力に裏付けられた作品です。

マミヤ645プロ　E100VS

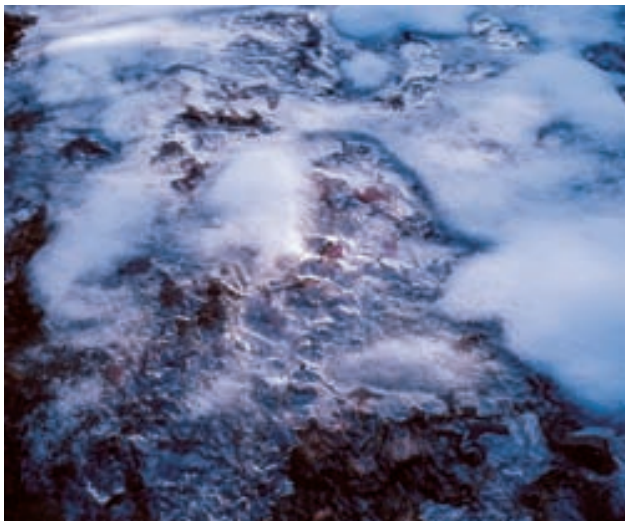
銀　賞

『朝　光』

虎渡　勇二(神奈川)

掛け軸にでもしたくなるような一幅の水墨画を思わせる秀作です。色彩に頼ることなくモノトーンの世界を描写することで、味わい深く幽玄さに満ちた作品に昇華しました。作者の力量が遺憾なく発揮された快作です。

ハッセルブラッド205TCC　EPR



マミヤ賞

『凍る岩』 入江　貞義(愛媛)

現実にあるものを即物的に撮るより、まったく別のイメージで表現する事も新鮮な印象を与えるものです。凍りついた岩の上に雪がまだらに降り積もっている様がまるで高山に雲が漂っているように見えます。現実から離脱するような表現がとてもよいと思います。

マミヤ7Ⅱ　E100VS

ポートレート撮影会2007フォトコンテスト

主催：コダックフォトクラブ／日本ハッセルブラッドフォトクラブ／ペンタックスファミリー／マミヤカメラクラブ

大阪会場 ── 2007年5月19日（土） 天保山公園　撮影指導：中村明巳氏、マツシマススム氏
東京会場 ── 2007年6月2日（土） 国営昭和記念公園　撮影指導：木村正博氏、須山実氏、その江氏
名古屋会場 – 2007年6月9日（土） 名古屋城内　撮影指導：安形嘉真氏、城戸京二氏、蜂須賀秀紀氏、松原伸一郎氏、三浦誠氏
撮影会参加者663名　コンテスト応募者276名　応募点数3588点

総評

東京・大阪・名古屋の３箇所で行われた４写真クラブ団体合同イベントです。撮影会後のコンテストの応募作品も多く、選考にはかなり時間と神経を使いました。選考で気になったのはプリントの仕上げとピントです。せっかくいい表情を捉えていながらブレていたり色が偏っているものが目につきました。撮影機材やモデルの表情に気を配るのは当然ですが、この点に配慮されると、より完成度の高い作品になります。

最優秀賞　『初夏の女』　根津甚平（大阪）大阪撮影会

モデルの表情を絶妙のフレーミングで捉えた作品です。あえてカメラ目線にとらわれることなく、視線を泳がせた瞬間を切り取っています。シャッターチャンスを見事にとらえています。

優秀賞
『しゃぼん玉』
川島一晃（埼玉）東京撮影会

このモデルは写真の撮られ方をよく知っている人で、慣れないカメラマンはつい写してしまいます。しかし、川島さんはモデルの演出を逆利用、少女のような可憐な表情をとらえ、ほのぼのとした画面を作り出しています。

優秀賞
『大胆に』
中村光三（京都）大阪撮影会

大きく張った木にモデルを座らせ、広角で遠近感を強調した画面作りが効果的です。正方形の対角線上に斜めに木を配したフレーミングも決まっています。

優秀賞
『初夏の異邦人』　木下邦允（静岡）名古屋撮影会

東欧系でしょうか？ ちょっと頬骨が高くライティングが難しいモデルですが、木陰の柔らかい光を選んで成功しました。ソフト効果を軽く加えることでファンタジックな印象の画面になっています。

入選

新井　剛	見つめられて
臼井　弘文	視線
岡本　誠一	待合
佐々木一郎	笑み
菅原　利明	木の葉模様
田村　新市	想い
戸田尚一郎	はにかみ
中川　幸藏	リラックス
平野　敏幸	そよ風の中で
藤井　聖子	太陽
森滝　肇	ほほえみ
守屋　康弘	視線
柳原　博志	ストーンストーム
山根　昌廣	白昼夢

入選
『えくぼ』
大島弘治（埼玉）東京撮影会　MCC会員

製品ニュース

645ProTL200台限定復活カラーバージョン

●塗装には車用の塗料を使用している為、
今までのカメラにはない滑らかな質感に
仕上げております。

●お好きなカラーを選んでいただけます。

●価格、発売時期等の詳細はフォトイメージング
エキスポ2008マミヤブースにて発表予定。

●事前にマミヤ・デジタルイ・メージングの
ホームページでも告知しますので、
ご確認ください。

※ご注文を頂いてからの塗装になりますので商品が
お手元に届くまでお時間をいただきます。

フォトイメージングエキスポ2008
2008年3月19日(水)～22日(土)
東京ビッグサイトにて開催

RB67ProSD用ZDアダプター

HX702

マミヤ・デジタル・イメージングでは2200万画素デジタルカメラバックMamiyaZDBackを
RB67ProSDに取り付けるためのアダプターRB67ProSD用ZDバックアダプター【HX702】を
発売します。

特徴

RB67ProSD用ZDバックアダプター【HX702】はマミヤZDBackをRB67シリーズカメラに取り付け、使用する為のアダプターです。このアダプターを使用することにより機械式フィルムカメラのRB67を2200万画素の高画素デジタルカメラとして使用できます。
アダプター本体にはRBカメラの特徴であるレボルビング機能を内蔵しており、カメラを傾けることなく縦横の構図の切り替えが可能です。またシンクロソケットが装備されていますのでストロボ撮影にも対応、レンズシャッターのRBシリーズはストロボ全速同調します。フィルムカメラの資産をそのまま使用できるRB67用ZDバックアダプターHX702、スタジオ撮影から野外撮影まで新たなデジタルイメージングの世界を広げます。

【製品仕様】
使用カメラボディ：RB67ProSD、RB67ProS
使用デジタルバック：マミヤZDBack
装備：電源スイッチ、外部ストロボ端子
　　警告ランプ、レボルビング機構
付属品：RBファインダースクリーンタイプ A
　　【SV707】(36×48 ／マット)
大きさ：117㎜(幅)×133㎜(高さ)×35.3㎜(奥行き)
重量：240ｇ

Photographers' Laboratory マミヤカメラクラブ会員特典

フォトグラファーズ・ラボラトリーはアナログ写真にこだわったプロフェッショナル・ワークを行っている現像所です。技術の高い、経験豊富な技術者がその技能を発揮するために設立された会社でもあり、プロラボが衰退するなかで、数多くの写真家よりクオリティの高い写真プリント制作を続けて欲しいという要望に応えて発足し、今までのプリントに満足できなかった方、技術者とコミュニケーションをとりながら作品創りをしたい方など、ご相談に応じさせていただいております。この度、マミヤカメラクラブ会員様は特別価格(特殊なものを除き、定価2割引)でご利用いただけるようになりました。ご来店の際には MCC 会員カードをご提示ください。メールオーダーの際は会員番号をお伝えください。クラブ員価格の詳細につきましては別紙プライスリストをご覧ください。

[営業案内]

●カラーリバーサル現像／カラーデューブ
(35㎜・120・220・4×5in・8×10in)

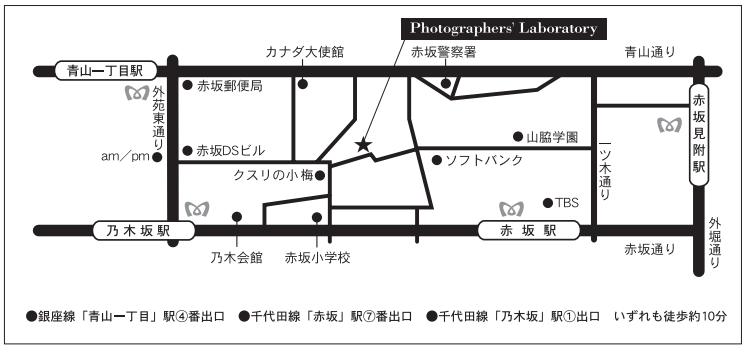
●カラー銀塩プリント
ネガ・ポジともにキャビネ～大全紙・全倍など定型サイズプリントから大型プリント(1枚もので最大1200×3000㎜／2枚以上のつなぎによれば更に大サイズ可能)まで

●B/W銀塩アートプリント
印画紙はバライタ・RCともに取り扱い。
サイズについてはカラープリントに準じます。

その他、デジタルプリントや写真パネル・額装など各種加工、写真展企画等、どうぞお気軽にご相談ください。

※ 遠隔地の方にはメールオーダーによる宅配サービスも承っております。同封の「メールオーダーのご案内」をご覧ください。

(弊社ホームページにも詳しい案内がございます。あわせてご覧ください。)



〒107－0052東京都港区赤坂7―5―34 赤坂リキマンション

フォトグラファーズラボラトリー
http://www.photographers-lab.com

TEL／FAX 03-3583-1607
営業時間　平日10:00AM～7:00PM
土曜のみ予約制にて～5:00PM／日曜・祝日休業
※プリントに関するご相談等は、平日でもご予約の上お越し下さいますようお願いいたします。

MCC ORIGINAL GEAR

ハンドメイド、オリジナル商品の為、受注生産。納期は1ヶ月程かかります。(下記の商品につきましては、現金販売のみとさせて頂きます)

マミヤ645専用チェストカメラケース

●ザックのショルダーに掛けて首にかかる荷重を軽減。ウェストバック型のマミヤ　645 専用カメラケース。ザックのショルダー部からジョイントテープで取り付けるので首や腰への負担が少なく、移動中でも速写に対応できます。

・マミヤ 645 がそのまま収まる(55―110 ㎜レンズ付まで)
・カメラの出し入れが容易で速写に対応
・ウェストバック、ショルダーバックにもなる。
・信頼のラムダ社製

寸　法／高 18× 幅 25× 厚 13 ㎝
表　材／強力ナイロン製
重　量／ 430g
カラー／ネイビー、ブラック
会員特別価格　15,225円(税抜価格 14,500円)

実物はマミヤのロゴが入ります

MCC 3D雲台 ●なめらかな操作の小型 3WAY 雲台。

中判カメラから大判カメラまで対応できる頑丈な小型雲台です。可動部の摺り合わせ面の平面性を極限まで高めており、適度な滑らかさとトルクが得られます。
・大型カメラの重量に耐える頑丈さ
・スムーズな操作性　・レバー式でかさばらない
・ブレーキレバーのストップ位置はワンタッチ変更可能

素　材／アルミ削りだし
高　さ／ 120 ㎜
重　さ／ 800 g
カメラ取り付け部 /60×80 ㎜
三脚取り付け部 / Ø80 ㎜

会員特別価格
94,500円(税抜価格 90,000円)
オプション：
ネームプレート名入れ　3,000円

MCCインフォメーション

乗鞍岳撮影会後記

2007年7月7日（土）～8日（日）

新緑時期の乗鞍岳撮影会。平地は既に夏の装いだが、この時期の乗鞍は所々に雪が残り、芽吹いたばかりの樹木や高山植物に出会うことができる。特に今年は雪解けの時期に気温が上がらず残雪が多い。貸し切りバスで新宿を出発し午後に到着。最初に撮影地として選んだのは位ヶ原より少し登った所。

ダケカンバやナナカマドの芽吹きに生命力があり、雪の中を耐え抜いてきた喜びが感じられる。空は陽が差したり、雲がわいたり、霧が出たりと様々な彩りを演出してくれる。目まぐるしい変化に撮影のタイミングを図るのも難しく、一喜一憂。それだけに楽しい撮影となった。夜は休暇村のビュッフェで食事を堪能した後、講師の花畑先生による写真教室が和気あいあいとした雰囲気で行われた。

日が変わっての早朝撮影。クラブ用に路線バスを１台増発してもらい肩の小屋口からのご来光撮影。濃い紫の空が段々と紅くなっていく様は筆舌に尽くしがたい。何とか作品に昇華させたいと願うが、これは腕次第。

日の出も良かったが、その後も遠く見える穂高をバックに滝のような雲が出現し、またとないシャッターチャンス。それぞれ工夫を凝らし人と違うアングルでこの美観をモノにしようと足早に散っていく。貸切バスが待つ場所まで下りながらゆっくりと撮影し、朝食に戻る。朝食後は遊歩道を牛留池まで撮影しながら歩く。小さな渓やヤマドリゼンマイの葉、珍しいギンリョウソウなども見られ、ゆったりした気持ちで撮影を楽しむ。

一休みした後はバスで一ノ瀬園地に移動、池に映る乗鞍岳や池周りの水風景を撮影し、撮影行程は終了した。撮影会は一度だけの勝負なので、全ての撮影地で良い撮影ができるとは限らないけれども、今回は気象条件に恵まれ、全ての撮影が変化に富み満足のいく撮影会になった。

【シグマラボ四谷MCC会員割引】

プロラボサービスがマミヤカメラクラブ会員特別価格でご利用いただけます。

四谷フォトギャラリーのあるシグマラボ四谷店では、MCC会員、準会員の皆様に特別価格でプロラボサービスをご利用いただけます。会員証を店頭にてご提示いただければ現像、プリント等が約20%引きの会員価格になり大変お得です。是非この機会にご利用下さい。
（四谷店のみ）

株式会社シグマラボ四谷営業所／四谷フォトギャラリー
http://www.sigmalab.co.jp
〒160-0008 東京都新宿区三栄町７番地
TEL.03-5269-2877　FAX.03-5269-2830

マミヤカメラクラブホームページ

マミヤカメラクラブのホームページをリニューアルしています。これまで以上に充実させ、クラブ員の皆様にもご参加いただけるようなページを目指しております。
皆様にご参加いただくクラブ員のページでは各自がお持ちのHPのご紹介や会員作品を閲覧できるWebギャラリーも作成していきます。ホームページや本クラブ誌におきまして情報や作品の募集を行いますので、是非皆様ご参加ください。
リニューアルの第一弾として過去のマミヤギャラリーを閲覧できるページを設けましたのでこちらもご覧ください。

http://www.mamiya.co.jp/community/mamiya_camera_club/index.html

マミヤカメラクラブ撮影会予定

幽玄の美景・由布川撮影会

2008年6月13日（金）～15日（日）
2泊3日

場所：大分県由布川渓谷周辺
講　師：林　明輝先生
定　員：30名

唐松の黄葉・富士山奥庭撮影会

2008年10月24日（金）～25日（日）
1泊2日

場所：富士山周辺
講　師：花畑　日尚先生
定　員：30名

MAMIYA CAMERA-PHOTO LIFE SUPPORT

マミヤカメラクラブ

写真を楽しむ･･･、
学ぶ･･･、そして集う。

写真を楽しむ、学ぶ、そして集う。
写真を通して写真を語り、撮影技術の向上を目指す方のためのクラブです。
マミヤカメラをご愛用の方ならどなたでもご入会できます。
講師指導の撮影会やクラブ員の全国フォトコンテスト、セミナーなどを実施しています。
撮影会では機材の無料貸出しがあり、使用してみたいレンズなどを試せます。
宿泊撮影会ではセミナーが開かれ講師のアドバイスが得られるほか、愛機のクリニック（点検･清掃）も受けられます。会員の方には、修理割引･オリジナルグッズ特別斡旋などの特典があります。

入会金：1,050円（消費税込み）
会　費：4,200円（消費税込み）２年会費
手　続：入会のご案内（払込取扱票付き）を事務局にご請求下さい。

クラブ員特典

●クラブ誌「マミヤギャラリー」の配布
クラブ員の皆さまの写真をより多く公表する場としてのクラブ機関誌「マミヤギャラリー」を年２回配布します。
●修理代金の割引
ご愛用のマミヤ製品の点検・修理を依頼する場合には、通常の修理代金より割引いたします。
●マミヤカメラクラブメール
クラブ主催のイベントや新製品情報など、写真に関する情報をいち早くお知らせいたします。
●マミヤオリジナルグッズの特別斡旋販売
マミヤ特製オリジナルグッズをクラブ会員特別価格でご提供させていただきます。

入会のお申し込み・お問合せは
マミヤカメラクラブ事務局
〒110-0005 東京都台東区上野 2-14-22 明治安田生命上野公園ビル 4F
TEL.03-5688-8024

マミヤカメラサービスセンター

修理をはじめオーバーホール、清掃などを専門に承ります。
また、マミヤ全機種を展示。実際に手にとって操作感や質量感を確かめられるとともにお客様の個性に応じた商品選定などのアドバイスも提供しています。
また、操作上の疑問にもお答えしています。電話、ファクスでも承ります。

東京サービスセンター　TEL 03-5688-8036　FAX 03-5688-8040　営業時間　9:00～18:00
大阪サービスセンター　TEL 06-6541-5631　FAX 06-6541-5769　営業時間　9:00～18:00
土、日、祝日は休業

マミヤ･デジタル･イメージング株式会社
本社 〒110−0005 東京都台東区上野2−14−22 明治安田生命 上野公園ビル4F
商品・修理に関するお問い合わせは、下記へご相談下さい。
東京サービスセンター 〒110−0005 東京都台東区上野2−14−22 明治安田生命 上野公園ビル4F
TEL 03−5688−8036　FAX 03−5688−8039
大阪サービスセンター 〒550−0015 大阪府大阪市西区南堀江1−10−11 西谷ビル
TEL 06−6541−5631　FAX 06−6541−5769

修理に関するお問い合わせは、マミヤカメラ認定修理センターへお問い合わせください。

マミヤカメラ認定修理センター

北海道地区　株式会社タック･カメラサービスセンター：〒060−0053 札幌市中央区南3条東4丁目
TEL 011−221−8507　FAX 011−232−3344
東北地区　ＭＣプロテック：〒983−0841 宮城県仙台市宮城野区原町5丁目3−44 森ビル202
TEL 022−297−3846　FAX 022−256−1808
東海地区　山田テクニカルサービス：〒496−0026 愛知県津島市唐臼町大門99
TEL 0567−32−2708　FAX 0567−32−3454

※マミヤカメラ認定修理センターでは、商品の説明に関する業務はいたしておりません。

《マミヤホームページ》http://www.mamiya.co.jp

この会報誌は最高級の美術印刷技術 HBP-700 を使用しています。